

Title	冷温帯域におけるオスの移動分散様式(III 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	小金沢, 正昭; 東, 英生
Citation	霊長類研究所年報 (1989), 19: 44-45
Issue Date	1989-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/163939
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

	6	3件 (5名)	2件 (4名)
	7	5件 (8名)	4件 (5名)
	8	4件 (12名)	3件 (10名)
計画	9	5件 (5名)	5件 (5名)
	10	2件 (5名)	2件 (5名)
	11	4件 (4名)	4件 (4名)
	12	6件 (10名)	6件 (10名)
	13	2件 (3名)	2件 (3名)
自由	資料	29件 (54名)	26件 (50名)
		12件 (32名)	12件 (32名)

(3) 研究会

昭和63年度は、「研究会」と小規模の「ミニ研究会」が以下のとおり採択・実施された。

A. 研究会

1. 第18回ホミニゼーション研究会
2. 霊長類の生体防御機構と感染症
3. 霊長類の生殖をめぐる
4. 運動器の系統発生
5. 霊長類の脈管系の機能と形態
6. 心理学と隣接領域の対話
7. ニホンザルの第四紀の古生態と古地理について

B. ミニ研究会

1. 利き手の進化と脳
2. 行動と集団の種内変異

2. 研究成果

A. 計画研究

課題 1

飛騨山系槍ヶ岳周辺に棲息するニホンザルの高山帯への適応についての生態学的研究

泉山茂之 (マカク研究会)

1988年度は、3月から5月までの積雪期に39日、6月から11月までの無雪期に50日の調査を実施した。環境庁から鳥獣捕獲許可を得て、高瀬川源流部の名無沢、ワサビ沢で4月9日、5月7日にそれぞれ8才、6才と推定されるオトナメスを捕獲、146.25MHz、146.11MHzのテレメーターを装着した。群れはYN群、EW群と別群で、個体数は21頭、42頭であった。これらの装着個体をテレメーターの電池寿命の尽きた9月下旬まで追跡するこ

とにより以下のことがわかった。

1) 積雪期3~5月上旬のYN群の遊動域は2.5km² (高度1,350~1,650m)、無雪期7月は4.5km² (2,000~2,860m)、8月は5.0km² (2,200~3,050m)、9月は10.5km² (2,300~3,100m) で、7、8月に比べ、9月の利用地域は約2倍、1日あたりの移動距離は約3倍であった。10月上旬にも高所(2,600m)で群れの棲息は確認したが、すでに電池寿命は尽き群れの特定、追跡はできなかった。

2) 無雪期と積雪期の利用地域は直線にして約5km離れており、無雪期の遊動の安定する7月中旬-10月上旬の間、YN群は積雪期の利用地域へ下降することはなく、完全に垂直的に使い分けられている。

3) 無雪期YN群の利用地域は槍ヶ岳を中心とした地域で、その西端は赤岩岳からやや大天井岳(2,922m)寄りの稜線であった。またEW群は約6km先の燕岳(2,763m)以北を利用していた。この間にテレメーターが装着されていない群れが2群確認され、槍ヶ岳寄りに出現する群れは積雪期に梓川で過している群れ、もう一方は牛房川の群れと推定された。

4) 9月8日に32頭+αのカウントをしたYN群がテレメーター装着の翌日(4月10日)のフルカウントでは21頭しか確認できず、同日1.5km上流で10数頭と考えられるグループを確認しており、この両グループが合流して無雪期に槍ヶ岳周辺を利用していると考えられた。このようなグループは高瀬川源流部で多数観察しており、今後各グループにテレメーター装着を実施し、それぞれのグループがどのように合流し、無雪期にどこに出現するかを明らかにしてゆきたい。

冷温帯域におけるオスの移動分散様式

小金沢正昭 (栃木県立博物館)

東 英生 (野生動物保護管理事務所)

ニホンザルの地域個体群において、成獣オスの分散は、その動態を知るうえで極めて重要な課題である。本研究は、栃木県の日光足尾地域に分布するニホンザルを対象に、未成熟個体へのイレズミと成獣個体へのテレメトリー法の適用とによって、継続的にオスの移動分散を解明しようとするものである。本年度は、隣接する3群(A、B、C群)の成獣メス各1頭(計3頭)を捕獲し、テ

レメトリー法による夏季の行動域の把握とこれまでに捕獲し首輪とイレズミによって識別された9頭の成獣オスの群れへの出入りを中心とした移動様式を調査した。

その結果、冬季の行動域にみられた群れの土地への執着性 (Stability or Fidelity) は夏季においても確認され (A、B群)、ニホンザルの群れが周年を通して土地に対して強い執着性を持っていることが明らかとなった。また、成獣オスの捕獲時とその後の社会的位置の変化をみると、捕獲時に群れ内にいたオス3頭は、夏季に一時的な群れからの移出を行なった個体 (#5395) もみられたが、3頭とも同じ群れ内に留まり、少なくとも2年以上留まっている。一方、捕獲時に群れ外にいた6頭は、2頭が捕獲地点を行動域とする群れに移入し (#5014=5380はA群、#5335=6085はB群)、のこり4頭は、少なくとも捕獲地点を行動域とする群れ (A、B、C3群) へは移入していない。さらに、このうち1頭 (#5340) は、8km東に離れた群れ (G群) の行動域内へ移動したことが確認された。次に冬季のオスの移動様式をみると、単独オスの1日の移動距離は、群れのそれと有意な差は見られていない。また、群れと行動域が重複している単独オスと群れとの距離は、隣接する群れ間のそれより短い傾向にあった。このことは、単独オスは、群れから離れた後も、群れと独立して移動しているものの群れの行動域からは離れず、常に着かず離れずの状態にあると考えることができた。

黒部川流域におけるニホンザル自然群の分布

赤座久明 (大沢野中学校)

加藤 満 (高蔵寺高校)

1987年に続き、黒部川流域に生息する群れの遊動域と個体数の調査を行った。調査期間は7月31日～3月31日までで、調査日数は99日間である。そのうちの7月31日～8月14日までと、12月27日～1月6日までは連日追跡調査した。

8月12日に、流域では最も下流に生息するOH-A群 (36頭) の雌の成獣1頭をハコワナで捕獲し、発信機を装着した。8月12日から3月31日まではレメトリー法によりOH-A群の泊り場の位置を記録して、遊動域の季節変動と泊り場間の距離を求めた。8ヶ月間に合計88日間の調査を行い88

地点の泊り場を記録した。群れの遊動域は黒部川に沿って細長く広がっており、上流側は宇奈月温泉の東側の黒部川右岸斜面、下流側は宇奈月町中谷地区の農耕地であり、遊動域の長径は南北方向に5.8km、短径は東西方向に1.2km、面積は約7km²である。遊動域は季節によって変化した。夏は農作物に依存して民家付近の農耕地を渡り歩くような遊動を行い、秋には種子や果実の多い落葉広葉樹林をよく利用した。冬は黒部川の川原に沿って標高200m前後の低い土地を移動し、農耕地や自然林の区別なく広い範囲を遊動した。泊り場の間隔の平均値は、8月が0.8km、9月が1.1km、10月が1.5km、11月が1.1km、12月が0.5km、1月が0.4km、2月が1.0km、3月が1.3kmであり、8月から10月にかけては増加し、10月から1月に減少して、1月から3月には再び増加する。8月は農耕地をよく利用するため、遊動域が下流側3kmの区間に点在する農耕地に限定されるため1日の移動距離は小さくなり、泊り場の間隔も小さな値になっている。10月は、標高300m～700mにかけての落葉広葉樹林を広く利用し、移動距離が大きくなり、泊り場間隔も最大値を示した。1月の値が最小になるのは、一ヶ所の採食地での採食時間が長く、移動の時間が短いという冬型の生活を行うためである。この冬型の生活様式は黒部川の上流域に生息する他の群れでも共通して観察されている。しかし、今回の調査では、冬期にもかかわらず、2月の泊り場間隔が1月の2倍以上の値を示しており予想外の結果になった。積雪量が少なかった今年の冬の特異的な現象なのか、又は、群れの本来の生活様式なのかは明らかでなく、さらに調査を進める予定である。

課 題 2

ニホンザル集団における優劣・順位と未成体の個体関係の調査

—岡山県北部2集団と放飼集団の比較—

渡辺義雄 (美作女子大学)

待田昌二・今川真治 (阪大・人間科学)

本年度は、岡山県真庭郡勝山町に生息するニホンザル餌付け集団と岡山県大佐町のニホンザル自然集団及び京都大学霊長類研究所のニホンザル放飼集団 (嵐山集団出自) において観察を行った。